

# 巻 頭 の 辞

同志社大学  
人文学会会長 木 村 俊 夫

同志社創立百周年を記念して、本誌を刊行できることは、大きい喜びであると共に、これに重ねてまた厳肅な気持をもわれわれは持つ。この百年に同志社の果たした文化的役割は、今では高い評価をうけてはいる。しかし少し詳しくこの間の歴史的状況を回顧する時、本学の歩んだ道は決して平坦なものではなかった、どころか、実に苦難と試練の連続であったことを知る。従ってわれわれはまた、この百年の歴史を守り育ててきてくれた多くの先輩の、骨身を削る苦心、努力のあったことに想いを到し、これをうけついでいるわれわれが、この歴史の伸張と充実に力をつくす覚悟を持つことなしには、記念という言葉は全く空疎なものとなるであろう。

われわれはまた、われわれの専門とする英語英文学の研究が、英学校として出発した本学の伝統の中心的部分を占めていることをも銘記しておきたい。しかも事実、文化の向上、人間の理解に文学の果たす役割は絶大である。昨年11月29日の創立記念祝典において披露された、アーモスト大学より本学への、友情のしるしとしてのプレゼントが、Robert Frost と Emily Dickenson の詩集、および、S. Schoenbaum, *William Shakespeare: A Documentary Life* の3点であったことは、文学の持つ意味の重要性を端的に示しているものと思う。

われわれは更に心を新たにして、次の二百年に向けて歩みを進めたい。過去百年の同志社の歴史は、主として新しい学問の姿勢についての先駆、先導的役割において評価されたとすれば、今後は更にこの学問の正しい方向づけと、深化に重点がおかれるべきであろう。いかにこれを果すことができるか、これがこれからのわれわれの持つ重要な課題であると思う。